

「文語の苑」福井シンポジウムの概要

愛甲 次郎

平成二十六年十月二十六日(日) 福井縣立圖書館において「越前と若狭 ゆかりの文語」と題したシンポジウムを文語の苑、福井・文語を楽しむ會、および福井縣立圖書館の共催で開催した。愛甲次郎・文語の苑代表幹事の挨拶「今なぜ文語か」に引き続き、カレル・フィアラ教授(福井縣立文書館副館長)、瀧一郎教授(大阪教育大學)そして市川浩(文語の苑幹事)が講演をし、その間、下條英子氏の朗讀があつた。このシンポジウムは多數の後援團體により可能となり、ここに謝意を表明するものである。

後援 福井縣、小濱市、小濱市教育委員會、永平寺町、永平寺町教育委員會、福井市、

福井市教育委員會、福井新聞、福井放送、福井テレビ(順不同)

連携 福井ライフアカデミー

愛甲次郎 「今なぜ文語か」

1. 言語には文章語と会話語が乖離する傾向があり、優れた文章語は文化水準の高さを示す。わが文語は世界四大文章語の一つである。
2. 文語は簡潔的確な表現が可能であり、心理描寫に優れ、何よりも律動感に溢れ詩作に向いてゐる。口語は文語の言語エネルギーを持ち得ない。
3. 明治維新と敗戦の二度の社會的變動の影響で文語は衰滅の危機にある。

4. 今からでも遅くない。文語を挽回することはできる。「文語の苑」は文語復興運動として既に十餘年の歴史を経てゐる。

瀧一郎「若狭の大人 伴信友」

若狭の生んだ國學者伴信友について古典の考證を能くし、神代文字を否定したことなどの事績を紹介した。

カレル・フィアラ「日本文化のつながりを支へる文語」

文語がなくなれば何が失はれるのか、すなわち文語の意義とは何か。

日本では、言語と文化が相俟つてその連続性と整合性が保たれてきた。しかし明治期に（政府や知識人の手によつて）それまでの日本語の歴史になかつた二つの大きな断絶が起つた。一つは日本（標準）語の中における上方要素の抑壓である。もう一つはその近代性、科學性、論理性を高めると稱して日本語の構成の中に西洋言語の要素を多く取り入れたことである。その結果例へば助動詞の完了用法は事實上廢止された。当時の言語政策は明治期の對西洋コンプレックスに影響されており、日本語を西洋價值觀の標準に無理やり合わせて再構成するといふ試みであつた。

日本文化の變動性國際性を支へる點では標準語が重要な役割を果してゐるのは當然であるが、一方文語は、具體的な時代・地方を超え日本文化史の連続性・統一性をもつとも完璧な形で保存された言語で

ある。この意味で文語は日本文化の個性、いはゆる「自己同一性」をもつとも明確な形で残し、傳へてゐる。この連続性・統一性は口頭傳承の文化しか存在しなかつた、いはゆる「原日本語」の時代に遡る。原日本語は縄文時代より遙かな過去に遡り、太平洋沿岸言語群に所屬した種々の言語のうち、現在まで生き残つた僅かな言語、アイヌ語、ギリヤーク語（また恐らくアメリカ先住民の諸言語も）を含むいはば「幻の語群」の一言語である。韓國語（朝鮮語）は日本語と基礎語彙を異にし、名詞、動詞、形容詞の距離を考察すると到底同系とは言へない。

九〇年代の半ばには六千を數へた言語のうち現在残つてゐるのはその半數と報告する學者たちがゐる。コンピューターは本來人間に役立つためのものであつたが、現在多くの人たちはむしろ、自らのコミュニケーション能力をコンピューター、スマートフォン或いはロボットの可能性に合はせようとしてゐる。今後さらに多くの言語が絶滅の危機に曝されてゐる。それは人間、民族、思想、言語、自己表現の仕方などの幅廣い多様性が失はれることを意味する。生命は多様性を前提とし、それが完全に失はれたときに宇宙も絶える。

文語は、日本文化の長い口頭傳承、日本文學の傳統を承けて、日本の信仰、思想、學問や藝術の豊かさを傳へてきた言語である。これからも文語が傳へられるやう心から祈る。

市川浩「正法眼藏を文語體として學ぶ」

正法眼藏第一現成公案冒頭にある「まどひ」と「さとり」に就き國語授業風に讀解。

先づ我々が迷悟、生死などを意識すとは、専ら佛法ありてこそその精神作用にして、その佛法を究めむとする佛道には成果の有無、即ち豊と儉の差あり。茲に生と死、迷と悟及び衆生と諸佛との差生ず。

而して生と滅、迷と悟、衆生と諸佛と、各一對の状態の一方、例ふれば「滅」、「迷」、「衆生」は兎角全く價值なしと見らるれど、花が散る「滅」を人は愛惜し、草が生ふる「生」を嫌ふれば、各對の兩者には絶對的の優劣、好悪ありとせず。以上佛法に基く對極を例示し、各の有無優劣の相對性を説けり。
(起)

次に佛道に於ける修證は主として佛典の考究を指し、これのみにては「迷」に止る。但し全くの無意味には非ず。考究を更に進め、佛典の中に自己を發見するを「悟」とす。この「悟」に至れるを諸佛とす。しかるに衆生はこの「迷」より「悟」に至るを得ず。更に「悟」に至りて更に上位の「悟」に達する者がある半面、益々「迷」に落ち込む者など、當に前出「豊儉」の二字が示す千差萬別に互る。

諸佛に二意あり、一は「悟」に至りたる諸佛にして、二は「證佛」の對なり。「證佛」とは、「佛を證しもてゆく」とし、就中「もてゆく」は動詞連用形に接續して、次第に動詞の表す状態への移行を意味す。故に「證佛」とは佛法を次第に明らかに「證する」なり。その對なる「諸佛」は「佛を諸す」と會すべく、説文解字に謂ふ「諸は辯なり」を引き、佛を辯ずとす。即ち「佛を分つ」又は「佛法が分る」と覺知するに非ずして、更に佛法を修證し、明らかにせむと勤むるが諸佛の諸佛たる所以なりと説けり。
(承)

目を轉じて、我々の認識力を觀するに、己の感覺器官、「身心」を總動員し、「見取」、「聽取」、「會取」

など己の認識に「取」入れ、懸命に外界を把握せむとすも、鏡が一瞬にして全てを映すが如くならず。

「色」に集中せば「聲」疎かに、「聲」に集中せば「色」疎かとなる。以上人間の感覺器官の限界を説く。
(轉)

佛道ならひて「悟」に至るとは、先づ「ならふ」に注目す。論語學而篇冒頭に學びて之を時に「習へ」とありて復習の重要性を述べ、芭蕉も松のことは松に「習へ」、竹のことは竹に「習へ」とて、孰れも繰返し研鑽するをいひ、その結果として自己を忘るゝに至る。かくて人間の不完全なる感覺を免れ、鏡の如き認識力を得。「他己の身心をして脱落せしむ」は難解なるも、道元禪師が天童如淨禪師よりの面授に際し、身心脱落せらるゝは立場を變ふれば、如淨禪師が他己なる道元禪師の身心を脱落せしめつべし。悟迹とは悟りの證跡をいふも、吾實際に悟りの經驗之無ければ、ここでは、古代漢土に於ける弓の名人紀昌、虱を埒の尾の毛で窗に吊るして見詰め、眼を鍛ふる事三年、遂に虱車輪の大きさに見えつといふ例を擧ぐるに止む。この悟迹はしかし最初は時々消え、また現はる。右の例にては虱が再び小さく見ゆ。これ休歇なり。されど更なる研鑽により、悟迹が長時間續くに至り、遂には常時眼前に現はるべし。以上佛道を只管勤めて遂に悟の境地にいたる筋道を示す。(結)

如上正法眼藏第一現成公案冒頭に就き、勿論佛教思想の立場よりは更に深き解釋のあり得る中、「文語文を讀む」立場よりの私見、何分にも無名淺學の講師として、内容に懸念の生ずる中、講演の實施に御盡力を賜りし小林千鳥様始め「文語を楽しむ會」の皆様は深甚の謝意を表する者なり。